東北アジアの先史時代漁撈

甲元眞之

はじめに

中国東北部は第二松花江流域を境として、大きく南北に分けられる。東北アジアの青銅器時代を代表する墓制である箱式石棺墓の分布はこれどまりであり、中国的生活様式を示す炊飯具の鼎の紀元前までの北限も第二松花江流域である。さらに下って遼代の熟女真と生女真の区別もほぼこの辺りであった。新石器時代から青銅器時代にかけて初期農耕の存在を示す道具や穀物の出土も、北緯四五度の線で限られ、それ以北の地域においては狩猟・漁撈・採集といった自然依存の生活が継続していたのである。[1] ただし農耕は営まれていなかったにしても、後の女真族の勃興にみられるように、独自の文化が形成されていたことは、その生活様式がある意味では自然条件に適合的であったからとも想定しうる。この地域にはとりわけ大河川や小湖沼（泡）が点在し、種的には少ないにせよ大形の魚類が豊富に存在することから、冬季に集中するシカやクマあるいはテンなどの獣類の捕獲と並んで、コイ科を中心とした淡水産漁撈への依存度が高かったことが窺えるのである。[2]

しかしこの地域を特徴付ける漁撈については、山浦清氏の回転銛についての簡単な紹介[3]以外には殆ど本格的に手掛けられていなくて、個別的な漁撈関係遺物の分析はほとんどなされていないのが現状である。

東北地域の漁網錘には新石器時代の当初から、楕円形をした小形の石の両端を打ち欠くか切目を入れた石錘が、青銅器時代（西団山文化）以降は管状土錘と長江型土錘が分布している。管状土錘や長江型土錘はいずれも中国の江淮地帯から青銅器時代にもたらされたもので、彼の地では刺網と投網の機能分化がみられたが、東北地域にまでその機能差が生きていたか否かを知る資料は発見されていない。東康遺跡出土の一括石錘を基に、赫哲族の用いる網から復元される在来の石錘を使用する網の大きさは、せいぜい長さが5mほどであり、しかも石錘の重さが軽いために大形の魚の捕獲用とは考え難い[4]し、追い込みのための網とも想定できない。さらにこの種の錘が分布する南朝鮮の東三洞貝塚で出土した櫛目文土器の表面に刻まれた網目から推定される漁網の目の大きさは、二・五cmであり、黒龍江省出土清代の網も同じくらいの大きさである。これから大型の魚類の刺網ではなかった事が窺われ、この地域の漁撈技術を代表する遺物とは必ずしも言えない。また内陸河川地帯では単式釣針と逆T字形釣針が存在するが、形態的変化に乏しく、また量的にも多いとは言い難いので、先史時代の中国沿岸部や日本などのような、その地域の代表的な漁撈具と見なすことはできない。さらに民族事例などでは梁や筌による漁撈法も存在するが、考古学的には未だ資料不足であるので分析の対象とはなりえない。従って目下のところ、残された銛（刺突具）による漁撈が重要な鍵を握ることになる。

オクラドニコフによって初めて注目された疑似餌を使っての釣漁撈は、この地域を特徴づける漁撈法のひとつであるとも考えられるので、離頭銛に言及する前に疑似餌についての考察から始めることにする。

I　疑似餌の出土例

東北アジアにおいて疑似餌の存在について最初に指摘したのは今から三〇年前のオクラドニコフである。[5]彼は黒龍江下流域のコンドン遺跡出土の石製品を取り上げて民族事例と比較し、疑似餌と想定した（第1図）。さらにコンドン遺跡と同様な出土品は黒龍江流域のノヴォペトロフスカ遺跡でも発見されていることを述べているが、ノヴォペトロフスカ遺跡の

報告書では該当するものが見つからない。[6]

コンドン遺跡出土の疑似餌は長さ一一・六㎝、幅二・四㎝ほどの隅丸長方形をなし、胴部の片側が抉れた軟玉製品で、一方の端に一孔が穿たれている（第1図右）。水面を早く走らせることで、あたかも小魚が河川を横行するかのごとく思わせるのであろう。

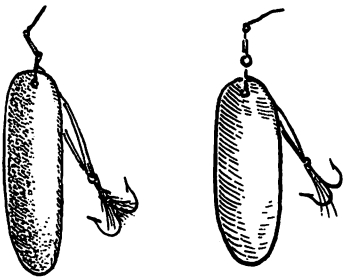
次にこれと同様に疑似餌と考えられる東北アジア出土遺物を取り上げてみよう。東北アジアでは二種類の疑似餌がみられる。一種類はコンドン遺跡出土品と同様に、それ自体が疑似餌となるルアーとも言うべきもの、他は疑似餌を巻き付ける胴部と想定されるもので、棒状をなす。

左家山遺跡[7]

吉林省農安県の松花江の一支流である伊通河を望む台地上にあり、河面との比高差が約二〇㎝余りを測る。層位関係から三時期に区分され、うち疑似餌は第三期層で発掘された。淡水産貝の殻の前面部を少し細く加工し、先端部に一孔を空けた半分の残存品で、残長五・一㎝幅二・一㎝。釣針の出土は見られないが、逆刺をもつ離頭銛二点、刺突具などがある。この時期の^{14}Cによる年代は4870±180bpを示す。

腰井子遺跡[8]

吉林省長嶺県の大沼沢地区に浮かぶように南北に走る台地上に立地する新石器時代の遺跡で、各層にわたり魚骨が厚く堆積していたと記されるが、その鑑定報告はない。漁撈具には固定式銛の他に、逆刺の付いた離頭銛などとともに疑似餌が出土している。一つは報告では蚌七とされているもので、長さ一〇・七㎝幅二・二㎝、先端部に孔をもつ（第2図5）。他の形態は骨飾とされるもので、長さ四・二㎝幅一・五㎝の長方形を呈し、両端近くにそれぞれ一孔を穿っている。周辺



第1図　オクラドニコフによる疑似餌の推定図
（左 民族事例　右 復元図）

は磨光してあるという。

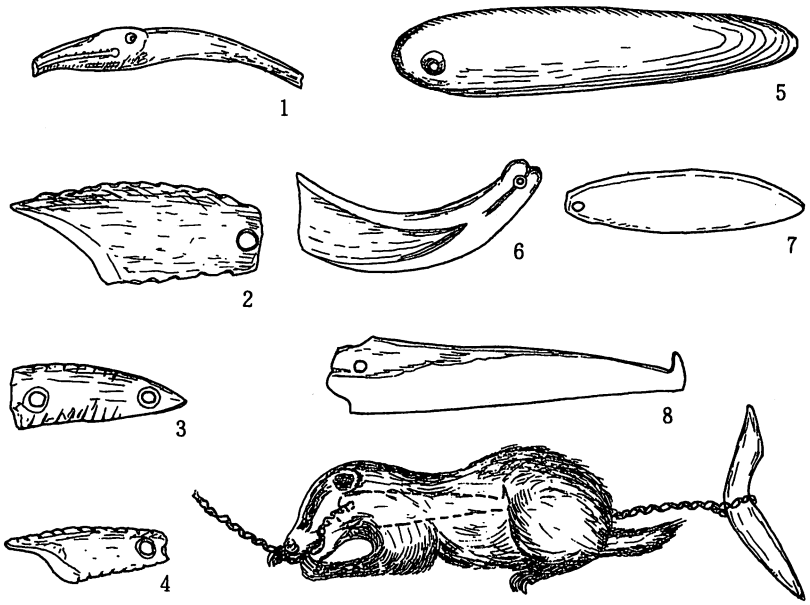
伴出する遺物には磨棒などはみられるものの典型的な農具はないことから、農耕文化段階に至っているとは想定できない。左家山遺跡とほぼ同じ時期のものであろう。

白金宝遺跡[9]

白金宝遺跡は嫩江の下流、約一〇kmほどで第二松花江と接する地点にあり、付近は河川の氾濫でできた幾多の沼沢を点在させる平原と砂丘や沖積台地からなり、遺跡は比高差が二〇mほどの嫩江左岸段丘上に立地する。白金宝文化の標識遺跡であり、^{14}Cによる年代では、2900±100bp、3290±170bpの数値を示す。多数の固定式銛や離頭銛、回転銛に混じって骨製の疑似餌がある。動物の肢骨を利用してつくるもので先端部に孔を空け、中央から下位部分を半裁する。長さは八・五cmを測る（第2図6）。

漁場遺跡[10]

吉林省大安県の洮児河と嫩江が混ざる地点にできた月亮（泡）湖の南岸にある漢書二期の墓地で、三点の



第2図　疑似餌（縮尺1/2）とその推定使用復元図
（1～4：新開流、5：腰井子、6：白金宝、7：平洋、8：東康）

蚌製疑似餌が出土している。前面は細く加工して刀状を呈する。先端部には一孔が穿たれている。

新開流遺跡[11]

烏蘇里江の源である興凱湖とその北側にある小興凱湖に挟まれた丘上にある、新石器時代早期から後期にかけての集落遺跡で、回転銛、離頭銛、固定式刺突具などの多数の漁撈具に混じって、上層期にはイノシシの牙を加工した疑似餌が出土している。報告では牙刀もしくは牙飾とされているもので、牙刀は末端部に孔をもち、その反対部分を斜めにそぎ落としたもので（第2図2、4）、牙飾は一方の端を尖らせて他方は平坦に加工し、両端に孔をそれぞれ一個空ける（第2図3）。前者は二四点、後者は七点の出土をみる。さらに鷹の口頭部を模倣した彫刻も長さが七・三㎝と手頃で、疑似餌の一つかもしれない（第2図1）。

東康遺跡[12]

牡丹江上流、渤海時代の上京龍泉府がおかれた東京城の東六㎞にあり、牡丹江に注ぐ馬蓮河北岸の第二段丘上に遺跡は立地する。いわゆる団結文化に属し、漁撈とともに初期的農耕を営んでいたと想定される段階にある。[13]

鈎網器と報告されたものがこれで第一次調査では七点出土している。大きなものは長さが九・三㎝幅一・九㎝で一方の端をうえ向きに尖らせ、他方の端に一孔をもつ偏平な作りで（第2図8）、小さな類例は長さ三・五㎝幅一・一㎝を測る。第二次調査出土品は三点あり、獣の骨を偏平に加工して一端を尖らせ、中央部付近に孔を空けている。長さについては記載がなく不明。またこの遺跡では「く」の字をした「逆T字形」鈎針が三点出土している。組み合せからみて疑似餌に付けられていたことが想定される。

これら疑似餌の年代をみてゆくとコンドン遺跡出土品や左家山遺跡、腰井子遺跡のものが最も遡上し、ほぼ五〇〇〇年前にあたる。今のところ年代的にはこの技法は、黒龍江水域での淡水魚を捕獲する手法として発明されたように窺える。こうした伝統は今日の東北北部に居住するツングース系の少数民族の技法に直接繋がる可能性は高い。

顎倫春族の民族誌によると、毛の付いたネズミやリスを使っての疑似餌釣りにより、イトウとかコグチマスといった一mを越す魚を釣り上げる方法がみられる。[14] 夕方から夜間にかけて疑似餌を水面すれすれに走らせると、大型の魚がかぶりつき、容易に捕獲できるという。上で挙げた東康遺跡の例は、このようにネズミやイタチあるいはリスなどの皮を巻付けて疑似餌とするものであり（第2図　復元図参照）、左家山遺跡などの貝で作るものはそれ自体が夕方水面を跳びはねる小魚を彷彿させるのである。後者の素材として使われる貝、軟玉、動物の骨はいずれも光りに反射しやすい性質のものである点で一致をみる。　中国東北部の新石器時代遺跡においては各遺跡から殆ど魚骨の出土を伝えるが、鑑定された事例は三ヵ所に過ぎない。

オロス貝塚：コイ、フナ、ナマズ、コウライハゲギギ、カムルチー

元宝溝遺跡：コイ、ケツギョ、ハス、アオウオ、タウナギ、ソウギョ、カワヒラ

新開流遺跡：アオウオ、コイ、ナマズ、サケ

これら数少ない報告の中から疑似餌釣りの対象となるのは、ネズミやイタチといった小型動物を食べる種類が挙げられ、元宝溝遺跡出土のケツギョがまず対象として想定できる。その他遺跡出土の報告はないが中国東北の北部地域についての地方誌にはしばしば登場する、[15] イトウやコグチマス、カモグチもその重要な対象であったと想定され、いずれも今後の新石器時代から青銅器時代の遺跡発掘調査で検出が期待される。

Ⅱ　離頭銛の出土例

東北アジアで離頭銛と想定できるものには、非回転式と回転式の両者があり、後者は閉窩式と開窩式に別れる。その他に石鋸を組み合わせてつくる銛、石銛などは使用方法によっては離頭銛としても使われた可能性があるが、今は取り上げない。さらに基部の短い固定式銛も弓弓耳状角製品や環状角製品などを使って離頭銛として使われることもあるが、この

地域ではそうした付属品は未だ注目されていない。

この地方に回転式離頭銛が存在することは前田潮氏によって指摘され、[16]後に山浦清氏により日本海北方水域との関連が述べられた。[17]また宋兆麟氏は中国新石器時代出土の銛を分析する中で昂々渓遺跡の銛などの言及し、離頭銛を有孔銛と有帯銛に区分し、顎倫春族のマレックとの比較で、その使用法を復元している。[18]ただし顎春族のマレックは必ずしも柄と先端部が切り離されないために、有孔銛は離頭銛の一種として扱いたい。ここではこれまでに中国東北北部地域やその隣接地で発見されている離頭銛を集成して、その年代と分布を把握することにする。

昂々渓遺跡[19]

細石器を中心として、一部に磨製石器や土器を含む文化層から骨製の逆刺をもつ銛が発見されている。数回にわたって発掘がなされているが、全体を統括する報告がないためにその概要が必ずしも明らかではない。またその所属年代も確定し難い。

図示されたものの中には末端部に孔をもつ離頭銛がある。

二克浅遺跡[20]

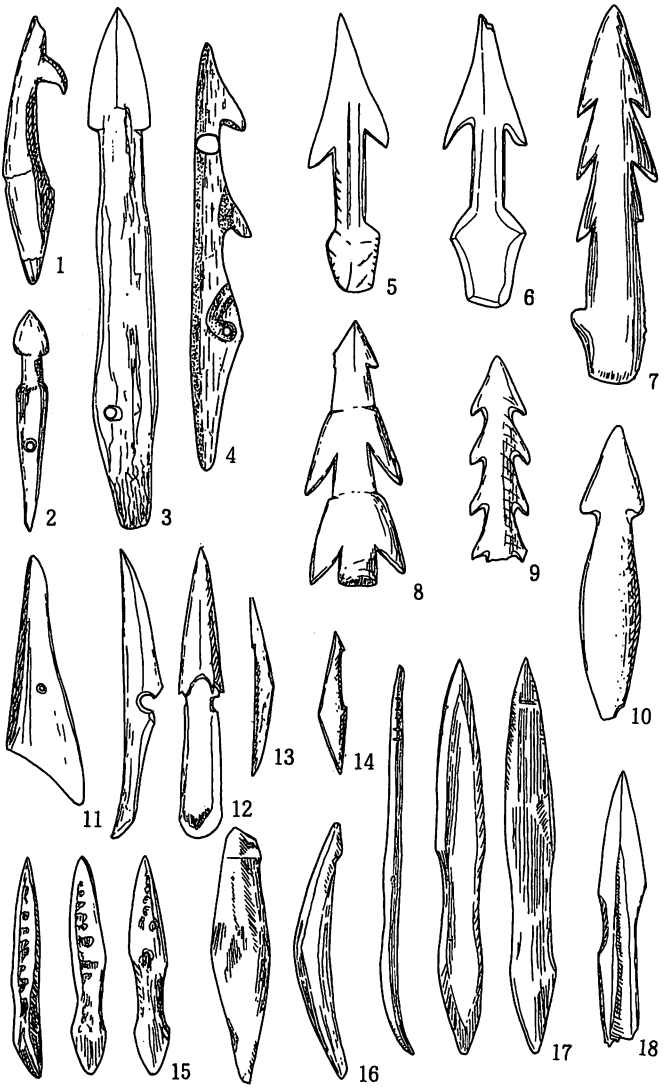
嫩江上流の左岸段丘上に立地する墓地群で、白金宝文化と漢書二期文化の中間に位置する時期と想定されている。この墓地のうち六号墓から三点の片側に逆刺のある有孔離頭銛が検出されている。図示された一点には孔から紐を嵌め込むように浅い筋が彫られている。長さは一四cm（第3図4）。

官地遺跡[21]

嫩江左岸台地上の小高い丘にある白金宝文化期の遺跡で、墓の副葬品として二点の銛頭が出土している。中央部に二孔をもつが、説明や図によっても閉窩式か開窩式か不明。

黄家圍子遺跡[22]

嫩江の支流である呼爾達河の流域にあり、遺物包含層から大量の貝、魚骨、小動物の遺骸とともに細石器、隆起文土器が発見されている。図示された一点の銛は逆刺を一個もち末端部近くに紐を縛るための抉り込みがみられるもので、長さ九・三㎝、幅一・七㎝を測る（第3図1）。



第３図　離頭銛実測図（縮尺1/2.5）
（１：黄家圍子、２～３、12：白金宝、４：二克浅、５～６、８：西浦項、７：農圃、９、13、14：新開流、10：前山、11：東山頭、15～17、ペスチャヌイ、18：老山頭）

東山頭遺跡[23]

遺跡は嫩江右岸に展開する底湿地から約三〇mほどの高さをもって南北に細く延びる台地上の北端に立地する。白金宝文化期（漢書第一期）の墓地が三基発掘され、うち一基の墓中の男性の左股骨上から閉窩式の離頭銛が一点出土している。長さは八・三cmで三角形をなし、中央に一孔をもつ（第3図11）。

漢書遺跡[24]

漢代と並行する頃と想定される漢書第二期文化層から帯孔骨器が出土したことが記されている。離頭銛の事とも受け止められるが確実ではない。なおこの遺跡から滑石製の釣針の鋳型が検出されている。

左家山遺跡[25]

松花江の支流である伊通河の北岸の段丘上にあり、河面からの高さが約二〇mばかりである。新石器時代の小珠山下層段階以降、新石器時代の終末にかけて連続する大規模な集落遺跡であり、その第三期に逆刺をもつ骨製の有帯銛頭が確認されている。長さは一二・六cmで末端部は斜めに殺ぎ落とされ、着柄の便をなしている。

泡子沿前山遺跡[26]

吉林市内の泡に囲まれた丘陵の上に立地する西団山文化期の居住地と石棺墓からなる遺跡で、住居址の中から逆刺をもつ開窩式の回転離頭銛が一点出土している。動物の管骨を利用してつくる、内面がやや窪むもので、長さは九・九cm、幅一・九cmを測る（第3図10）。

腰井子遺跡[27]

吉林省のほぼ中央部にあり、広々とした草原と大規模な沼沢地に囲まれた低い丘上に遺跡はある。左家山遺跡の第一期から第三期に相当する時期の集落址で、逆刺をもつ離頭銛や紐を結ぶための抉りをもつ骨製品が数多く発見されている。遺跡では魚骨が厚く堆積していたと記されるが、分析はなされていない。

白金宝遺跡[28]

嫩江が第二松花江と交わる付近の左岸台地上にある白金宝文化の標識遺跡で、住居址から多数の銛頭が出土している。それらは孔をもつ離頭銛（第3図2、3）と閉窩式の回転式離頭銛に分けられ、前者の出土量が多いらしい。回転式離頭銛は中央部に孔を一対もつ長さが九・六cmのもので、孔のすぐ上にわずかな逆刺がみられる（第3図12）。なお離頭銛の一部は矛として分類されるほどの大形のものがある（第3図3）。長さが一七・四cmほどで、末端部近くに孔が一点穿たれている。

老山頭遺跡[29]

松花江右岸の河面をみおろす低い山の頂きにある集落遺跡で、大量の魚骨とともに一点の回転式離頭銛が出土している。動物の管骨を利用し、中央部に浅い抉りをもつ簡単なもので、開窩式銛であろう（第3図18）。

大牡丹屯遺跡[30]

牡丹江上流の団結文化に属する遺跡から開窩式離頭銛と想定できるものが出土していることが、山浦氏によって指摘されている。[31]写真でしか知り得ないが、形態的には妥当するようだ。

牛場遺跡[32]

牡丹江上流の第一段丘上にあり、石灰場遺跡や東康遺跡とは指呼の間にあり、また渤海の上京龍泉府の四km東に位置している。団結文化の文化層のなかで大量の魚骨に混じって、一点の離頭銛が採集されている。円みを帯びた逆刺の両下に紐掛けのための浅い抉りをもつもので、矛として報告されている。

新開流遺跡[33]

遺跡発掘報告では逆T字形釣針とされたものは、山浦氏によって開窩式離頭銛であることが突き止められている。併せて七点出土していて、大きさは四・五～六cmとまちまちであるが、湾曲する片側にかすかな逆刺をもつ（第3図13、14）。

このほかにも有帯銛が多数みられるが固定式銛か離頭銛かの区別ができない。いずれも上層文化期に属するもので、^{14}C年代では6080±130bpを示している。

ペスチャヌイ遺跡[34]

ペスチャヌイ半島先端部の周辺海岸段丘上に形成されたヤンコフスキー文化の代表的な遺跡で、多数の開窩式回転離頭銛（第3図15、17）、結合式釣針、単式釣針などが多数出土している。回転式銛の中には新開流遺跡と同様な型式もみられる（第3図16）。この遺跡からは大形の海獣や魚の骨が大量に発見されている。

西浦項遺跡[35]

豆満江出口の裏側にあたり全面に広いラグーンを望む小高い丘陵上にあり、新石器時代の初期から鉄器時代にいたる大規模な居住遺跡である。大量の海獣が発掘され、豊富な漁具も報告されている。離頭銛と断定できるのは両側に逆刺をもつ長さが九・二～九・七cmのもので（第3図5、6）、新石器時代の初頭に属する。そのほかにも新石器時代中期の三段の逆刺をもつ長さが八・八cmの骨製銛頭もみられる（第3図8）。小形の銛は固定式か離頭銛か判定できないものが多い。青銅器時代（紀元前一〇〇〇年紀）になると明らかに開窩式離頭銛と想定できる型式が登場する。

この遺跡では多数の海獣類が出土している。今その数量を掲げると、ゴマフアザラシ四三頭、トド一頭、クロアシカ七八頭、オットセイ四七頭、スナメリ九頭、セミクジラ八頭であり、発掘面積に比べて出土量の多さが目を引く。

農圃遺跡[36]

朝鮮東北部の海岸平野に浮かぶ新石器時代後期の集落遺跡で、西浦項遺跡と同様な逆を三段もつ長さが一二・六cmの離頭銛と逆刺が片側にのみある離頭銛がそれぞれ一点づつ出土している。

片側に逆刺をもつ銛は旧石器時代後期からすでに認められ、新石器時代初頭には東北各地で報告されている。これらは

いずれも固定式の銛と想定され、離頭銛がいつからこの地方に出現するか明らかではない。非回転離頭銛で年代が最も遡上するのは、黄家圍子遺跡や西浦項遺跡の例で次いで新開流遺跡の例が挙げられる。これと形態的に近いものに左家山遺跡出土品がある。これらは銛の端部に節を作り紐を括るものであるが、非固定式銛であると断定するには疑問の余地がないわけではない。より明確に離頭銛と想定できる有孔の離頭銛は二克浅の墓地副葬品で春秋期にあたる。昂々渓遺跡の例もこれと同類であるが、その所属年代は必ずしも明らかではない。もしも昂々渓遺跡の出土品が新石器時代初頭に属するのであれば、先の黄家圍子遺跡の例も離頭銛として推定でき、新石器時代の当初から節帯をもつ離頭銛と孔をもつ離頭銛の二種類が存在していたことになる。下っても新開流上層段階（C14年代では6080±130bp）には確実に登場していたことが知られる。

回転式離頭銛も最古のものは新開流遺跡の事例である。しかし東北アジア北部で一般的にみられるようになるのは白金宝文化以降の段階であり、紀元前二〇〇〇年期のある段階で、かなり急速にこの漁撈法が東北アジアに展開して行ったことを窺わせる。

こうした銛漁撈はその対象として想定できるのは沿岸部では海獣類であり、内陸河川では大形魚類である。黒龍江流域に生活する赫哲族は離頭銛を使用してソウギョを捕獲することが知られている。[37] しかし、それ以外にチョウザメも離頭銛の主たる対象になっていたことは、例えば一九世紀はじめに斉斉哈爾に赴任した清の官僚である西清の『黒龍江外記』巻八には、

捕之（チョウザメ）之法、長縄系叉、叉魚背縦去、徐挽縄以従数里外、魚倦少休、敲其鼻、鼻骨至跪、破則一身力立葛、然后戮其月思使痛、自然一跃登岸、索倫尤壇能。

とあることによって、離頭銛によるチョウザメの捕獲が行われていたことを窺うことができる。するとこれら東北アジア出土の銛などは主として、チョウザメなどの大型魚類の捕獲にまずは充てられていたと想定できよう。

Ⅲ　文献にみられるチョウザメ

中国東北地域で今日までに報告された発掘調査例のなかではチョウザメの出土は確かめられていないので、漁撈技術と捕獲対象動物の関係が明確になりにくい。しかし文献史料においてはチョウザメがしばしば登場し、チョウザメ捕獲の記事さえ記録されている。チョウザメは古くは秦王魚もしくは牛魚と呼ばれ、後に鱣魚、鰉魚、あるいは鱘魚の名称が一般的となる。そこでここではこうした文献史料によって窺われるチョウザメについて見て行き、考古学的遺物との関連を考えて行こう。

今日中国東北地域で見られるチョウザメには3種類がある。

アムールチョウザメ Acipenser schrencki Brandt（第4図1）

ダウリアチョウザメ Huso dauricus Georgi（第4図2）

チョウセンチョウザメ Acipenser dabryanus Dumeril（第4図3）

アムールチョウザメ（鱘魚：アムールスキーオショトル）は主として松花江に産し、全長が三mほどを普通とする。肉は大変美味しく、頭骨は煮干しにされ、鰉魚脳として珍重された。ダウリアチョウザメ（鰉魚：カルーガ）は黒龍江の泥底に住み、夏季に河を遡のぼって産卵し、松花江では三姓（依蘭）まで上り、まれに嫩江まで達する。また烏蘇里江や興凱湖でも産卵するために上るチウザメがみられる。チョウセンチョウザメ（カラチョウザメ）は渤海湾に注ぐ河川に棲息する類で、鴨緑江から朝鮮中部地域にもたまに見ることができる。長江流域に棲息するものと同種で、冬に海に下るものもある。

東北アジアで当面対象となるのはアムールチョウザメとダウリアチョウザメの2種である。中国東北地方でのチョウザメについて記載された文献として、以下のようなものが挙げられる。

一、嫩江のチョウザメ史料

北宋程大昌の『演繁露』には

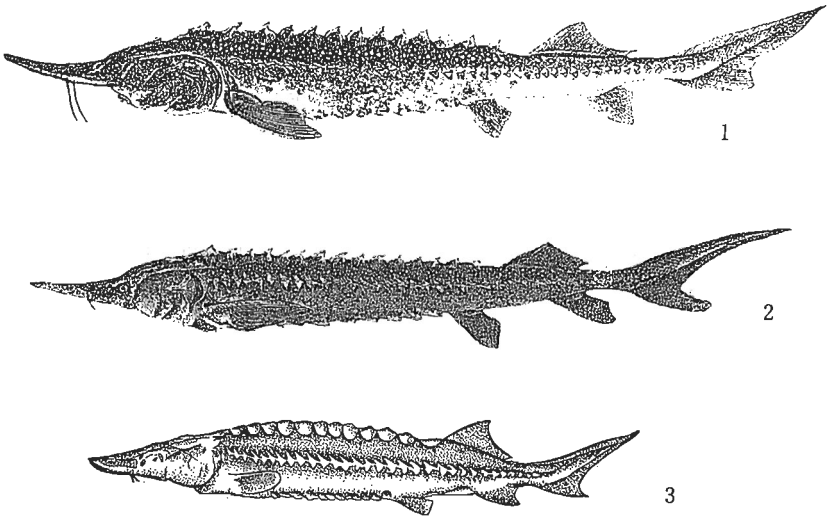
契丹主撻魯河釣牛魚、以占歳。

とある。契丹（遼）の皇帝は春夏秋冬居住地を巡行するのを常とし、春正月から三月までの捺鉢（ナポ）は鴨子河（嫩江）下流にあった（『金史』巻三十二、「営衛志、中」）。そこで氷下の魚を捕獲していたという記載が少なからずみられる。撻魯河は今日の洮児河に当たり、春居住地近くの嫩江の下流で合流することから、このチョウザメ釣の記述は正月恒例の占いとも想定される。

先に引いた西清撰『黒龍江外記』では嫩江下流の斉斉哈爾城付近での魚についての記載がみられる。その巻八には

鱣鰉魚古名秦王魚、音之訛也。大者首尊車。捕之之法・・・・

とある。しかしこれより以前、一七世紀に父の配流に従ってこの地域を訪れた方式済の『龍沙紀略』には、清への貢納品として魚類ではアムールイトウを挙げ、物産



第４図　チョウザメ実測図（縮尺約1/40）
（１：アムール・チョウザメ、２：ダウリア・チョウザメ、３：チョウセン・チョウザメ）

には夏にはコイ、冬にはヒラウオ、ケツギョがあるとするほかカモグチに話が及んでいるが、チョウザメには言及していない。これからすると嫩江流域ではチョウザメは量的に多くはなかったことも考えられる。

二、松花江および黒龍江のチョウザメ史料

北魏、隋唐時代には第二松花江は速末水もしくは粟末水と呼ばれ、遼の太宗の時に混同江と改称され（九四六年）、さらに聖宗の時に第一、第二松花江が一筋の河川と認識されて、混同江と統一的に呼ばれるようになった（一〇二四年）が、一部土地の人は松阿里江または松花里江とも称した。また大きな川という意味の満語の烏喇をつけて烏喇江と呼ぶ場合もある。黒龍江は隋唐時代以来黒水の呼称が一般的であるが、文献によっては時に松花江、混同江と混乱している場合がある（『金史』巻一に「混同江亦号黒龍江」とある）。また下って清代の文献にも混同江が海に尽きることを記述する例もあり、黒龍江が松花江と合流して海に流れるまでは、黒龍江とも混同江とも称されてこの河に関する呼称は必ずしも一定しなかったらしい。

『金史』巻二四、「地理志上」には

会寧府旧歳貢秦王魚、大定十二年（一一七二）罷之。

とあり、金の上京会寧府は哈爾濱近くの阿什河流域にあり、その下流は松花江に注いでいる。首都近くでの捕獲であれば東流松花江を指すとみられるが、金の会寧府の支配領域は、北は海倫から南は長白山に及ぶために、捕獲場所は松花江流域としか特定できない。北宋周麟之撰『海陵集』に記された、

有梁大使者、先朝内侍官也。入館伝旨、賜金蘭酒二瓶、銀魚、牛魚二盤。又云出渾同江、其大如牛。

は、宋から金への使者として遣わされた人の記録であり、また次の南宋周必大撰『二老堂雑志』は周麟之のことを述べているので、事例としては同一である。

金主愛之、亨以所釣牛魚、非旧例也。

『大明一統志』巻八九「女真」には、

鰨鰉魚牛魚、混同江出、大者長丈五尺、重三百斤、無鱗、骨脂肉相間、食之味佳。

とある。以上の文献は場所は特定できないまでも松花江流域でチョウザメが棲息していたことを記すのに対して、以下の記録は第二松花江中流域の烏喇地方でのチョウザメについて記述したものである。

『清太祖実録』天聡九年十一月発丑の条。

又遼河向無鰨鰉魚、惟烏喇江黒龍江有之。

南懐仁撰『韃靼旅行記』

烏喇是臨江城市、去吉林三十三里、稍上流所、盛産鰨鰉魚。

高士奇撰『扈従東巡日記』

我太祖高皇帝攻取烏喇地為我有。山多黒松、結松子甚巨。土産人参、水出北珠、江有鱣魚、禽有鷹鶻、海東青之類。

『扈従日記』

去大烏喇據村、八十里、地名冷堋、産鰨鰉魚據。

また次の文献は清代においての松花江流域でのチョウザメの特産について記すが、場所は特定できない。第二松花江流域一帯での事柄であろう。

『大清一統志』

牛魚出女真混同江、大者長丈余、重三百斤、其肉脂相間、食之味佳。

薩英額撰『吉林外記』巻七、物産條

鱣鰉即鰨也。長丈余、鼻長有鬚、口近頷下。

『盛京通志』

牛魚出混同江。

姚元之撰『竹葉亭雑記』巻八

鰉魚胆骨、鰉魚頭也。出黒龍江一帯、魚頭大者、須一車載之。

『東海小志』

鰨魚遼名色里麻魚、鰉魚即鱣魚、肉白脂黄、遼時名阿八児魚、今出混同江。

以上の他に一五世紀中頃の原本をもとに嘉靖一六年（一五三七）編纂した『遼東志』やそれを補綴した『全遼志』にもこの地方の物産として、チョウザメの記載がみられる。また以下の三点の記録は清代後半期の烏喇でのチョウザメ猟を記録したものである。

英喜撰『打牲烏喇志典全書』巻二

採捕鰨鰉魚条

『欽定大清会典事例』巻八百八十九

毎旗選壮丁十九名、於冬夏二季、専捕鰨鰉魚、免捕貂鼠。

『打牲烏喇地方郷土志』

物産の条

三、牡丹江の史料

清呉振臣撰『寧古塔紀略』は一七世紀後半に父に従って寧古塔（今日の寧安県）で生活した時分の記録で、その流域に住むギリヤークなどの少数民族を含めて、牡丹江流域の風俗が数多く描かれている。その中で牡丹江上流域での魚類につ

いて次のような記載がある。

（牡丹）江中有魚（トガリヒラウオ）、极鮮肥而多。有形似縮項魚扁、満名発祿。満州人喜食之、夏間最多。・・・・亦有鱘鰉、他如青魚、鯉魚、鯿魚、鮒魚其最多者也。

清楊賓撰『柳辺紀略』は父親が南明の政治活動に係わりあいがあったとして、一七世紀後半に寧古塔に流されたために、後一六七一年から七二年にかけて父を尋ねて寧安県を訪れた時の記録が中心となったものである。その巻三には、

牛魚鱘魚也。頭略似牛、微与南方有別、土人直呼爲鱘、中土人或謂之牛耳、重数百斤、或千斤、混同、黒龍両江、虎児哈河皆有之。

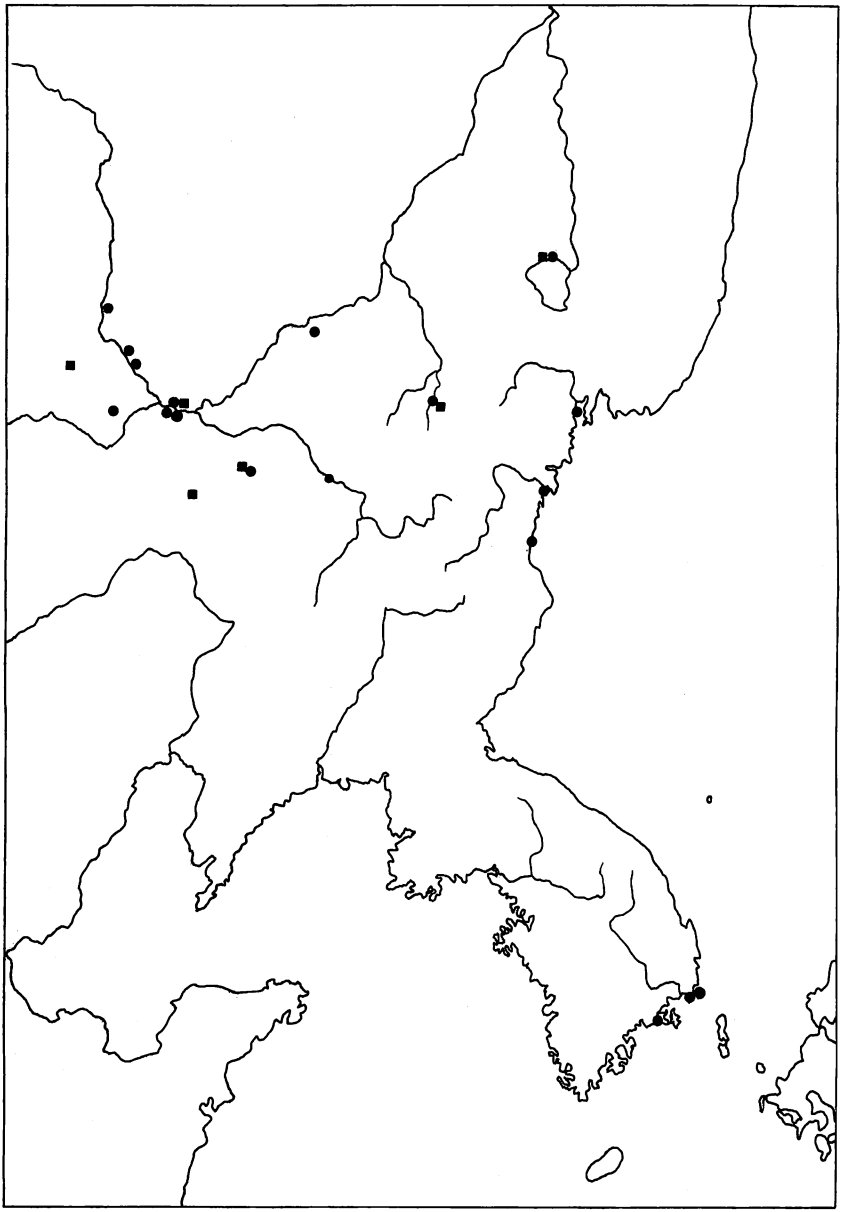
とあって松花江や黒龍江、牡丹江でチョウザメが捕られたことがわかる。また今日の吉林市周辺の物産として

柳条辺外山野江河産珠人参貂獺・・・鱘鰉諸物。

が掲げられて、第二松花江でチョウザメ猟が行われていたことを記録している。

以上の文献の記するところによると、宋代から清代にかけて松花江流域や嫩江下流域、それに牡丹江流域や黒龍江流域ではチョウザメは確実に捕獲されていたことがわかる。なかでも第二松花江の吉林北部烏拉街では、チョウザメの清への朝貢品を捕獲する特定の場所が一七世紀以降設定されていたほどであった。しかし、清代末期に作成された『長白匯征録』によれば、第二松花江上流地域においては棲息する主な魚として、コイ、ヒラウオ、フナ、ハクレン、コクレン、ケツギョ、カムルチー、ウナギ、タウナギ、イノシシギギ、アカメマス、アオウオは掲げられているもののチョウザメに関する記述はなく、この地域はチョウザメの自然分布範囲から外れていた可能性が高い。

すると第二松花江中流域から松花江それに黒龍江にはチョウザメがかなりの密度で棲息していたと推定できるし、嫩江も下流地域には分布していたといえよう。またこれまでの文献による記述の違いから、松花江流域では大型のアムール・



第５図　疑似餌（■）及び離頭銛（●）出土遺跡分布図

チョウザメが、黒龍江流域ではよれよりやや小型のダウリア・チョウザメが捕獲されていたと考定される

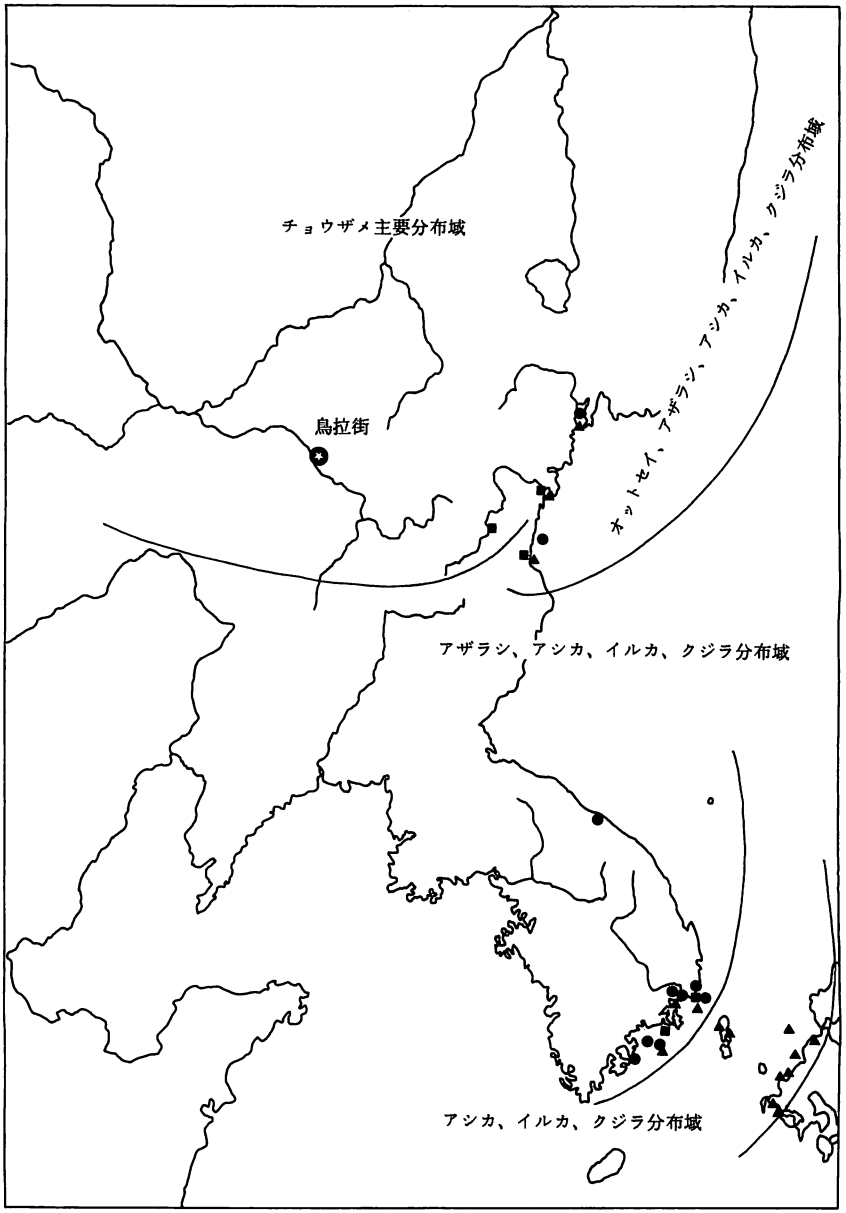
離頭銛による漁撈は、沿岸部においてはその対象が海獣類であったことはこれまでに推定されてきた。[38] 実際離頭銛が出土する遺跡では海獣類が多く出土している（ペスチャヌイ、西浦項、農圃、東三洞）[39] し、離頭銛の分布範囲に海獣類も多く発見されている。従って離頭銛は海獣類あるいは大形の魚が捕獲対象であったことがまず想定できる。バイカル湖周辺の中石器時代から新石器時代にかけては銛や結合式釣針によって、チョウザメが多く捕獲されていたことが知られるし、[40] 歴史時代の中国においてもこのようにチョウザメに対する漁撈が重要であったこと、さらに内陸河川一帯に離頭銛が分布する（第5図参照）ことなどを併せ考えると、新石器時代の遺跡からチョウザメの骨の出土は見られないものの、東北北部において離頭銛によってチョウザメが捕獲されていたと想定することができよう。

おわりに

先史時代の東北アジアの内陸部においてはこのように多種多様な漁撈具が存在していて、それが一つの大きな特色となっている。そしてそれらは機能分化しながら、使用されていたことを窺わせるのである。在来の石錘や土錘による網漁撈は中小の魚類が対象であり、長江型土錘が導入されるとハクレン、コクレンそれにソウギョといったコイ科の淡水魚が捕獲の対象となり、疑似餌を使う釣り漁撈はイトウやコグチマス、あるいはカモグチといった大型の肉食魚類が、離頭銛はチョウザメなどの大型の魚類が主たる対象であったと考えられる。

問題なのは内陸河川と沿岸部という魚種が異なる地域に、少しづつ組み合せや形態を変えながらも共通する漁撈具が分布する現象をどのように理解するかである。ちなみに東北アジア内陸部と沿岸部それに朝鮮の南部地域の先史時代漁撈具をまとめると次のようになる（第6図参照）。

東北アジア内陸部　　網漁撈—切目・打ち欠き石錘



第６図　組合わせ銛(■)、結合式釣針(●)、海獣(▲)出土遺跡分布図

釣漁撈—逆T字形釣針、単式釣針、疑似餌、
銛漁撈—固定銛、離頭銛（回転式、非回転式）
網漁撈—切目・打ち欠き石錘

東北アジア沿岸部
釣漁撈—結合式釣針、単式釣針
銛漁撈—固定銛（組み合せ銛）、離頭銛（回転式）
網漁撈—切目・打ち欠き石錘

朝鮮南部沿岸
釣漁撈—結合式釣針、逆T字形釣針
銛漁撈—固定式（組み合せ銛）、離頭銛（回転式）

結合式釣針は未だ中国東北部では存在が確認されていないが、シベリア東部地域には分布しているので、今後発見される可能性は高い。対称的なのは非回転銛と固定式とした組み合せ銛の分布である。石鋸はシルカ洞窟や朝鮮東北の茂山といった内陸地点から出土している以外は、いずれも朝鮮以南の沿岸部にのみ分布がみられる。[41] この二者は現在までの分布状況を見て行くと、いわば棲に分けの状態にあり、非回転式の離頭銛の代用として石鋸を使う組み合せ銛が出現した可能性が高いことを物語っている。

東北アジアにみられる共通する漁撈方法は、明確には新開流遺跡段階からはじまり、考え方によっては新石器時代初頭にまで遡上することがその所属年代によりわかる。すると基本的には内陸河川一帯で開発された漁撈技術が沿岸部に及んで魚種の異なりに対する処方から、幾つかの展開がなされたのではないかと想定もできよう。この想定を裏付けるものとして、沿岸部地域においては北部から南部に下るとともに、海獣類の種類が減少してゆき、それが西北九州に及んでいることである。第6図に示すように朝鮮北部沿岸地域では、オットセイ、アザラシ、アシカ、イルカ、クジラが捕獲されているが、朝鮮南部ではこの組み合せからオットセイが脱落し、西北九州ではアザラシが抜け、中・南九州や山陰ではアシカが

無くなる状況が描かれる。離頭銛、結合式釣針、組み合せ銛にみられる漁撈具は豊富な海獣類や大型魚類が棲息する地域にあってこそ有効な道具であることから、こうした傾斜は日本海北部沿岸地域が海獣狩猟の出発点であった可能性を物語っているといえよう。さらに遡上すれば、内陸大河川流域で創造された大型淡水魚捕獲の方法が、回遊魚を求めての沿岸部地域との交渉の過程で、海獣類の捕獲へと転化していったと考えるほうが、出土漁撈具の年代的な観点からも符合する。

その当否はやがて明らかにされるであろうが、残された問題としてはこうした共通する漁撈技法がほぼ紀元前二〇〇〇年紀に一般化することであり、この当時の状況はまた別の角度からの検討が必要になってくるであろう。

注

(1) 甲元眞之「東北アジアの石製農具」『古代文化』第四一巻四号、一九八九年。
甲元眞之「東北アジアの初期農耕文化」『日本における初期弥生文化の成立』文献出版社、一九九一年。
(2) 岡本正一『満支の水産事情』水産通信社、一九四〇年。
甲元眞之「中国東北地方の先史時代漁撈復元」『岩崎卓也先生退官記念論文集』雄山閣、一九九四年。
(3) 山浦清「中国東北地区における回転式銛頭について」『貝塚』第三一号　一九八三年。
(4) 注(2)に同じ。
(5) A.P.Okladnikov, The History of Fishery in North-Asia. FOLK. No.5, 1963.
(6) А. П. ДЕРЕВЯНКО, НОВОПЕТРОВСКАЯ КУЛЬТУРА СРЕДНЕГО АМУРА. НОВОСИБИРСК 1970.
(7) 吉林大学考古教研室「農安左家山新石器時代遺址」『考古学報』一九八九年二期。
(8) 吉林省文物考古研究所・白城地区博物館・長嶺県文化局「吉林長嶺県腰井子新石器時代遺址」『考古』一九九二年八期。
(9) 黒龍江省文物考古工作隊「黒龍江肇源県白金宝遺址第一次発掘」『考古』一九八〇年四期。
(10) 吉林省博物館文物隊・吉林大学歴史系考古専業「吉林大安漁場古代墓地」『考古』一九七五年六期。
(11) 黒龍江文物考古工作隊「密山県新開流遺址」『考古学報』一九七九年四期。
(12) 黒龍江省博物館「東康原始社会遺址発掘報告」『考古』一九七五年三期。
黒龍江省博物館考古部・哈爾濱師範大学歴史系「寧安県東康遺址第二次発掘記」『黒龍江文物叢刊』一九八三年三期。
(13) 村上恭通「東北アジアの初期鉄器時代」『古代文化』第三九巻九号。

(14) 韓有峰編著『顎倫春族風俗志』中央民族学出版社、一九九一年。
(15) 注（2）に同じ。
(16) 前田潮「オホーツク文化とそれ以降の回転式銛頭の型式とその変遷」『東京教育大学文学部史学研究』第九六号、一九七四年。
(17) 山浦清「北西太平洋沿岸地域における回転式銛頭の系統問題」『物質文化』第三五号、一九八〇年及び注（3）に同じ。
(18) 宋兆麟「帯索標—鋒利的漁猟工具」『中国考古学会第一次年会論文集』文物出版社、一九七九年。
(19) 尹達『新石器時代』新華書店、一九五五年。
(20) 安路・賈偉明「黒龍江冒内河二克浅墓地及其問題探討」『北方文物』一九八六年二期。
(21) 趙善桐「黒龍江官地遺址発現的墓葬」『考古』一九六五年一期。
(22) 吉林省文物考古研究所「吉林黄家圍子遺址発掘簡報」『考古』一九八八年二期。
(23) 吉林省博物館「吉林大安東山頭古墓葬清理」『考古』一九六一年八期。
(24) 吉林大学歴史系考古専業・吉林省博物館考古隊「大安漢書遺址発掘主要収穫」『東北考古与歴史』第一号、一九八二年。
(25) 注（7）に同じ。
(26) 吉林市博物館「吉林市泡子前山遺址和墓葬」『考古』一九八五年六期。
(27) 注（8）に同じ。
(28) 注（9）に同じ。
(29) 趙善桐「黒龍江賓県老山頭遺址探掘簡報」『考古』一九六二年三期。
(30) 黒龍江省博物館「黒龍江寧安県大牡丹屯発掘報告」『考古』一九六一年一〇期。
(31) 注（3）に同じ。
(32) 黒龍江博物館「黒龍江牛場新石器時代遺址清理」『考古』一九六〇年四期。
(33) 注（11）に同じ。
(34) A. П. ОКЛАДНИКОВ, ДРЕВНЕЕ ПОСЕЛЕНИЕ НА ПОЛУОСТРОВЕ ПЕСЧАНОМ У ВЛАДИВОСТКА. М.И.А.112.М.-Л. 1963.
(35) 金用玕・徐国泰「西浦項原始遺跡発掘報告」朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古学及民俗学研究所『考古民俗論文集』第四号、一九七二年。
(36) 考古学研究室「清津農圃原始遺跡発掘」『文化遺産』一九五七年四期。
(37) 凌純聲『松花江下游的赫哲族』一九三四年。
(38) 注（16、17）に同じ。
(39) 甲元眞之「朝鮮先史時代の漁撈関係自然遺物」『古文化談叢』第三〇集、一九九三年。
(40) 甲元眞之「先史時代の対外交流」『岩波講座日本の社会史』第一巻、一九八七年。
(41) 山崎純男「西北九州漁撈文化の特性」『季刊考古学』第二五号、一九八八年。